慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	プルーストと笑い : (1)笑いと微笑
Sub Title	Proust et le rire (1) le rire et le sourire
Author	末木, 友和(Sueki, Tomokazu)
Publisher	慶應義塾大学藝文学会
Publication year	1999
Jtitle	藝文研究 (The geibun-kenkyu : journal of arts and letters). Vol.77, (1999. 12) ,p.335(150)- 347(138)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	井口樹生, 高山鉄男両教授退任記念論文集
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00072643-00770001-0347

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

プルーストと笑い　(1) 笑いと微笑

末木　友和

『失われた時を求めて』[1]における笑いの様相を考える作業の一環として、本稿では、作中人物たちがどのように笑いにかかわっているのか、大まかな見取り図を作ってみたい。そのためにまず、『失われた時』全篇に現れる「笑い」rire と「微笑」sourire という言葉をひろいあげ、どの人物がどのように笑い、笑わせ、また笑われているのかを調べることにする(微笑についても)[2]。もとより笑いや微笑は、その言葉があるところにのみあるわけではない。作中のコタール夫人は「その方は私たちを涙が出るほど笑わせましたわ。でも、なんですか、すべては話し方一つですわね」と言う (I, 257)。とくにプルーストの笑いは語り口のなかにこそあると思われるが、いまはその微妙な作業をするときではない。

笑いと微笑とはどう違うのか。辞典『ロゴス』は「大きな口の開き、顎の筋肉の収縮、多少とも不規則で音声をともなう呼気」を笑いの特徴とし、微笑については「唇の軽い動き」と「さまざまな情動または感情（嫉妬、皮肉、愛情、共感、憐憫、満足）の現れ」を挙げている。微笑 sourire は sous-rire だから笑いの下位概念で、つまりは“ちょっと笑う”ということだろう。プルーストには、フランソワーズの「あの小さな笑い」ces petits rires (II, 335) があり、ゲルマント公爵夫人の「半笑い」un demi-rire (II, 203) があり、さらにはシャルリュスの「半微笑」le demi-sourire (II, 604、注 1)、アンドレの「半ば微笑して」en souriant à demi (III, 599) もあるが、とくに意識的に使い分けているとも思えず、目下のところは笑いと微笑とをへだてる本質的な違いはないと考えておく。

ただ先取りしてプルーストに言わせれば、笑いにおいては「音声をとも

なう」どころか笑い声の音色こそが重要であり、「笑い」を目的語に取る動詞は「見る」よりは「聞く」ほうがずっと多い。また微笑につきものなのは「唇の動き」だけではなく、視線こそ不可欠の要素である。語り手は、祖母の微笑の「奇妙さ」から、病気の彼女が視力を失っていることを知る（II, 332）。さらには「筋肉の収縮」は微笑においても重要な要素で、『見出された時』に集う老女たちは容色の衰えを微笑で補おうとするが、「筋肉の失調」のせいで泣き顔のように見えてしまう（III, 947）。

さて以下に、CD-ROM〈DISCOTEXT 1〉によって、『失われた時』における「笑い」と「微笑」という言葉の頻度を出してみた(3)。この二つの言葉の用例だけを調べていると、『失われた時』の登場人物はやたらに笑いやたらに微笑しているように思えてくるのだが、プレイヤード版全三巻のなかにこの回数というのは果たしてどう考えるべきか。そこでついでに、このCD－ROMでの操作が許すかぎりで他の主要小説家との安直な比較をこころみたが、もちろんその結果に厳密な統計的価値はない。

プルースト	（Pléiade版の約3,000ページ）	笑い	402回	微笑	619回
ゾラ	（同　約 3,000ページ）	笑い	1,182回	微笑	833回
モーパッサン	（同　約 2,500ページ）	笑い	725回	微笑	440回
フロベール	（同　約 2,000ページ）	笑い	392回	微笑	252回
バルザック	（同　約 1,850ページ）	笑い	318回	微笑	311回
スタンダール	（同　約 1,200ページ）	笑い	226回	微笑	112回

それと意識せずに読んでいたときの私的な印象に立ちもどってみれば、ゾラの人物たちがよく笑い、微笑していること、またプルーストは他の作家と比べてもとくに多くはないことがやや意外である。後者の点については、冒頭に述べた「話し方一つ」の問題にかかわってくるのだろうか。一方、あえてプルーストの特徴を挙げれば、微笑の回数が笑いを大きく上回っていることである。シャルリュスの笑いについて、語り手は「彼ははじけるように笑いはじめたが、その笑いは、喜びの証しであると同時に、人

間の言葉ではその喜びを言い表せないことの証明でもあるように思われた」(III, 658) と言っている。つまり情動の急な高まりが言葉になるまえに身体的興奮となって現れるわけで、このように直情的に噴出する笑いよりは、微笑が示す、水面下の動きの表徴としてのかすかな波紋のほうがプルーストにはふさわしいと、これは首肯できるところである。

『失われた時』全七篇の各篇における笑いと微笑の頻度については、ブリュネ『プルーストの語彙』(4)に見られるとおり、笑い、微笑ともに『逃げさる女』がもっとも低く、『囚われの女』、『見出された時』と続く。『逃げさる女』の笑いにいたってはたったの五例しかない。つまり後半の三篇が、それも極端に、笑いも微笑もしなくなっている。このことは晩年のプルーストに残されていた推敲の時間と関連するのだろうか。

『失われた時』のなかで笑い（笑う、笑わせる、笑われる）と微笑（同左）にかかわる人物を、その回数の多い順に列記すれば以下のようになる。

笑い……アルベルティーヌ、ゲルマント公爵夫人、シャルリュス、貴族階級（複数）、語り手、オデット、スワン、乙女（複数）、カンブルメール一族、ヴェルデユラン夫人、ジルベルト、ブロック、フランソワーズ、ゲルマント公爵、サン＝ルー、語り手の家族

微笑……貴族階級（複数）、ゲルマント公爵夫人、シャルリュス、オデット、アルベルティーヌ、語り手、スワン、ジルベルト、フランソワーズ、祖母、サン＝ルー、コタール、ヴェルデユラン夫人、ノルポワ、アンドレ、乙女（複数）、ゲルマント公爵、ヴィルパリジ夫人、語り手の家族

つぎに、めぼしい笑いと微笑とを各人物にからめてひろっていくことにする。

アルベルティーヌの「笑い」は語り手と彼女との関係を象徴している。彼女が語り手の恋の相手として登場してくる背景には海辺の乙女たちがいるが、その笑いの背景にも乙女たちの笑いがある。語り手が堤防の上の乙

女たちを見かける、その二三年前の写真によれば「当時から笑いはずっと彼女らにつきもの」で、まだ少女の年齢の彼女らの表情は個性的でなく、「彼女らの個体生活の唯一の表明と思われる頓狂な笑い」の状態だった。彼女が語り手のまえに浮上してくるのは、乙女たちが「もはや子供時代の笑いではない」笑いをもらすようになったときである（I, 823)。ついでながら、思春期の彼らが遊ぶ“にらめっこ”を直訳すれば“笑うが負け”になる（I, 905)。物語が進んでアルベルティーヌは語り手の欲望の対象となるから、その「ちょっとみだらな笑い声のひびき」が握った手の感触と同様に肉感的に聞こえる（I, 919)、「官能的な笑い」（II, 1129 ; III, 130）をもらす。また疑惑と嫉妬の対象でもあるから、背後に闇をかかえた「深い笑い」（II, 796, 1120 ; III, 130）である。彼女の笑いはその「ばら色の頬」のように語り手の脳裏につきまとって離れない。アルベルティーヌの笑いは、見る（聞く）側の心象によって色づけされる、プルースト的観念論の主流をいく笑いである。

笑いの世界では主役級のアルベルティーヌの微笑は、頻度の高さに比して意外にも表層的なものが多い。「微笑はより多くの友情を差し出すが」、その微笑の上の花咲く髪のカールのほうがもっと欲望をそそる、と語り手は言う（III, 19)。彼女は語り手と接吻することをやめた日から微笑を見せなくなる（III, 427)。

異種の乙女ジルベルトの笑いもアルベルティーヌとほぼ同質だが、アルベルティーヌの笑いが疑惑の種をはらんだ笑いだとすれば、ジルベルトのは語り手にとっての透明な謎、未知の世界を象徴する。「しばしばその言葉にはそぐわない彼女の微笑は…（中略）…眼に見えない一面があることを示す」（I, 490)。以前にした「変な笑い方」、それと同じ「不可解な笑い」（I, 630)。「要するに笑いというものは、その意味がよく分かったと確信できるほどはっきりした言語ではないのだと思った」（I, 584)。

ジルベルトの微笑も笑いと同様に語り手の気がかりの種である。最初の出会いから、語り手がうけた躾からすれば「軽蔑の印としか思えないような得体の知れない微笑」（I, 141）を向けられた語り手は、彼女がその後ば

ったりとシャン＝ゼリゼに現れなくなったとき、「ただ彼女の微笑しか思い出せなかった」(I, 490)。付き合いがこじれて微笑がなくなるときのジルベルトの顔はむしろ醜い (I, 584)。のちに『見出された時』で顔を合わせて、相手が誰と分らない老年の二人は微笑を浮かべて見合ったまま記憶を探る (III, 980)。

母親オデット似のジルベルトの笑顔のなかに「父親の頬の楕円形」(I, 564) だけを残したスワンは、物語冒頭で語り手の二人の大叔母を相手に笑いの提供者役を演じるのが読者には印象的だが、その後は社交人の気配りによる温厚な笑いと微笑が目立つだけだ。

一方オデットほど、笑い、とくに微笑が、その境遇の変化に忠実に対応する人物はいない。スワンを知り染めしころの初々しいそれから、サロンで座を取りもつ女主人のそれへと。オデットの微笑は、アルベルティーヌの笑いやジルベルトの微笑が語り手を悩ませたように、スワンの恋の一喜一憂の種となる。恋愛初期の「(胸に挿した) “カトレヤの花を直す”」所作を許すのは「微笑して、軽く肩をそびやかして」である (I, 233)。やがて「他の人について話すときには嘲笑的になり、彼に向けるときにはやさしくなった微笑」(I, 276) が、「やさしい、強情な、当惑をこめた微笑」(I, 291) に変わる。スワンは彼女の微笑を自分に都合よく解釈して望みを託すが (I, 302)、最後には、恋敵フォルシュヴィルとエジプトへ行くことを「微笑をふくんだ腹黒い眼で」暗黙のうちに告げられる (I, 355)。スワン夫人となったオデットはしだいに社交界に地歩を築き、「微笑するすべを心得ている階級」、すなわち大ブルジョワから抜け出して貴族社会まであと一歩という階級まで行きつく (I, 639)。サロンを構えると「公爵夫人のような軽蔑の微笑」(II, 871) を浮かべるようになる。

語り手、スワンについで『失われた時』のなかで恋をするサン＝ルーも、娼婦ラシェルの「微笑ひとつ」のために苦悩の日々を送る (II, 159)。

本物の公爵夫人であるゲルマント夫人に「特有のはじけるような笑い」には二つの目的がある。一つは誰かをからかっていることを示すこと、もう一つは「生き生きした口元と輝く目」を強調して美しく見せること (II,

333)。彼女を笑わせ、晴れやかな顔にさせるのは「その才気や美貌への讃辞だけ」(I, 340) である。目的の前者については、これが夫人の笑いの真骨頂である。パリ社交界の守護女神たる自負と鋭い知性が「笑うべきもの」(II, 227) を看過させない。笑われるのはガラルドン夫人、ラシェルなどなど、分をわきまえずに社交界の規範にそむくもの、踏みにじるものである。この笑いにはサロンの場を仕切る女主人としての役割があって、夫人の辛辣かつ才気ある話に一座はどっと沸く。だが夫人の笑いの鋭さも晩年には衰えを見せる (III, 577)。夫のゲルマント公爵は、自分の洒落には声を出して笑うが他人のそれにはにこりともしない (II, 284)。また妻の才気が自慢で、その笑いの引き立て役となる (II, 507)。

シャルリュスにまつわる笑いも義姉のゲルマント公爵夫人とほぼ同質のもので、社交界の帝王として傍若無人に笑い、笑わせ、人を笑い者にする。遠い先祖から受けついだ「彼に特有の小さな笑い (声)」は、古楽器のように貴重な音色をもつ (II, 942)。男色の下地が出ると、その笑い声には「女学生や小娘たちのかん高く、若々しい笑い」がまじる(I, 764 ; II, 620)。

この貴族社会の人間たちは微笑についてはどうだろうか。『失われた時』のなかの微笑を彼らがほぼ占有しているのも、社交界にあってはそれがあるべき礼儀だからであり、下の者に対してはそれがお愛想になるからである。ゲルマント公爵夫人は「人に会うと、相手が挨拶をするまえに自分から微笑を向けるほど」(II, 579) であり、だから夫人の微笑の基調は「愛想のよい社交夫人の穏やかな微笑」(II, 227) である。まだ若く、夫人に憧れていたころの語り手は、オペラ座で受けた夫人からの「微笑の、きらめく天上の驟雨」(II, 58) に有頂天になる。礼儀としてのこうした微笑は良かれ悪しかれ彼らには身に沁みこんでいる。戦死した貴公子サン＝ルーは、国を守る戦士たる貴族の鬱勃たる気概を「ずっと微笑の下に隠していた」(II, 851) と語り手は言う。この寸言には『失われた時』におけるサン＝ルーという存在の意義がみごとに凝縮されている。こうした微笑については語り手はむしろ好意的で、「人の良さに満ちた微笑の下に、自分が内部に

もっている特殊な小宇宙の越えられない敷居を隠している」大貴族と、自分の優位を高飛車に誇示する成り上がりの大ブルジョワとの間に一線を画している（II, 37）。

ノルポワ侯爵の微笑もこの伝統に与するが、外交官だけにいっそう意識的で、スクープ記事で彼の手腕を伝える新聞が「持ちまえの如才ない、魅力的な微笑をもって」と書いたのに対して、外交官にとっては「如才なく」の一語で充分だと考える（III, 636）。

ゲルマント夫人についで微笑をふりまくシャルリュスでは、ときおり「軽蔑的」微笑が目立ち（II, 556 ; II, 704）、「上品な微笑」がその声や腕の振り方とあいまって男好きを暴露する（II, 966）。そして男色について語るときには「だらしない」微笑を見せる（III, 788）。

結局は、ゲルマント公爵の「虚栄心」からくる微笑（II, 237）、カンブルメール＝ルグランダン夫人のような「芯がなく、いたずらに宙をただよう微笑」（II, 822）などなど、貴族界の凡俗の微笑については語り手の眼はきびしく、「愛想の良い」ゲルマント公爵にくらべて、「ほとんど微笑しない」ゲルマント大公のほうが「本当に裏表のない率直さをもっている」と喝破する（II, 655）。

社交界にどっぷり浸かったスワンの微笑は、貴族界の上質な微笑の部類に属する（I, 640 ; II, 579）。

貴族界のあとを襲う勢力、ブルジョワのヴェルデユラン夫人の笑いもゲルマント公爵夫人に似ているが、笑いすぎて顎をはずして以来、笑いに耐える仕草が得意となり、むしろ気の利いた、辛辣な表現でサロンの常連を笑わせることに熱心である（I, 205）。顎の恐れがない微笑は、夫人にとってサロンを統べる「ディレッタントの、審判者の、女主人の微笑」（II, 964）である。スワンを追い出すときには微笑をこわばらせ（I, 284）、苛められ役のサニエットにも一度だけは微笑の餌を与えておく（II, 930）。夫のヴェルデユラン氏は、笑いに耐える妻の向こうを張って咳き込む仕草をもって上機嫌の証とする。しかし笑いに同調する愛想のよさでは妻に敵わないと思い、ゲルマント公爵と同様、引き立て役にまわっている（I, 205）。

つぎに『失われた時』の道化役すなわち笑われ、笑わせる存在とも言うべき三人にふれておこう。コタール、サニエット、ニッサン・ベルナールである。

ヴェルデユラン夫人のはずれた顎をもとに戻したのは、そのころはまだ駆け出しだった医者のコタールだという。とすると、それほどの大笑いをさせたのも彼だったかもしれない、というのはコタールは語呂合せつまり駄ジャレを得意としているからである。『見出された時』の英訳者シドニー・シフは「コタール医師の冗談にはどれほど笑ったことか……滑稽の極みです」とプルーストへの手紙に書いている[5]。しかし実のところ、さほど上等なものではない。トイレに行くのに「オーマール公爵と話しに行く」(I, 262)（オー・マール　男のおしっこ。公爵は実在の有名人物)、患者に牛乳をすすめるときに「スペイン流行りですからな、オレ！オレ！」(I, 498)（オー・レ　牛乳入り）の類で、スワンはこれを「セールスマンの冗談」で面白くないと思っている（I, 250)。コタールは自分ではあまり笑わないが、曖昧な微笑はたやさない。「どんな表情にも、条件つきの、仮の微笑を添える」のは、相手の真意を計りかね、対応の方向を見きわめるまでの時間稼ぎである（I, 200)。その無言の表現を彼は「“誘いの手”と呼んでいる」(I, 202)。ヴェルデユラン夫人はエルスティールに「コタール先生の微笑」を描いてほしいと頼む（I, 203)。コタールほど、プルースト的、とはつまり重層的な微笑を体現している者はいない。駄ジャレのあとでは「頭を動かさずに、こっそりと右に左に、不安そうな、しかし微笑をふくんだ視線を投げる」(I, 251)。ほかにも「得意げな」(I, 522)、「自己満足の」(II, 881)、「好色の」(II, 887)、「“科学の王者”にふさわしい鷹揚な」(II, 912）などなど、多様な微笑を見せる。彼はシャルリュスのひそかな趣味に気づいていて、シャルリュスがその気もなく彼の手を撫でたときには「おびえきって眼をきょろきょろ」させる（II, 1072)。喜劇の舞台そのままのこの場面には狂言回しの面目躍如たるものがあり、プルーストの笑いへの意志が鮮明である。コタールが得意げな微笑を浮かべて使うイタリア語 tutti quanti（その他大勢の意。II, 881）について、プルーストは

ある手紙で「コタール医師という『スワン』の一人物なら言いそうなtutti quanti」と書いている[6]。

狂言回しではあり、語り手からいくら悪く言われるにしても(「人は、文学に無知で、くだらない駄ジャレを言っていても（中略）大臨床医になることもできる」(I, 433);「このように取るにたらない、平凡な男」(II, 322);「もちろんコタールやブリショのような人を本能的に好きではなかったが」(III, 742))、コタールはヴェルデユラン夫人のサロンでは主要な常連客として成功した。サニエットはもっと悲惨である。語り手の評価はコタールよりもずっと高いにもかかわらず（「幼時の無垢の名残とでもいった精神の美徳」(I, 203);「多くの人よりも学識があり、聡明であり、善良である」(II, 1022))、彼はヴェルデユラン夫人のサロンで手厳しく笑い者にされ、「本人以上に私にとって苦痛な」このサニエット苛めを終わらせるために語り手が介入することさえある（II, 936)。座談の流れに乗り、“受ける”言葉を発し、“笑いを取ろう”とする志は同じでも、なぜコタールは成功し、サニエットは失敗するのか。語り手は、両者を比較しつつ、座談の技術論を一ページ余にわたって開陳している（II, 871)。それは要するにサニエットが臆病で、不器用だからである。そしてその限りでは語り手も同情的でいられるが、それに虚栄や見え透いた計算が入りこむと、こんどは三ページにわたるサニエットおよびサニエット式人物への攻撃となる（II, 1022)。この件りには、サロンの人プルーストの実感がにじみ出ている。コタールとサニエットの違いに一言つけくわえれば、コタールは「故郷を出るときに先見の明ある母親からもらった忠告にしたがって」、いろんな言い回しや固有名詞をちゃんと調べてから使うほど用心深い（I, 200)。一方サニエットは、「語呂合せにも進化があるのは文学のジャンルや伝染病と同じ」（とこれもプルーストの笑いの意識の一端か）だというのに、二番煎じを平気でやる（II, 937; 939)。

ブロックの父が妻の叔父ニッサン・ベルナールを笑い者にするのは、バルベックの別荘の家賃を払ってもらっている負い目があり、人が良くて苛められても無抵抗で、自分が消そうとしているユダヤ的な匂いを無思慮に

発散するからである（I, 773）。無抵抗という点ではサニエットに似ていて、助け舟を出そうとした語り手に、ヴェルデユラン夫人は「あんなふうに寝そべった犬みたいにしてないで、どうして反発しないんでしょう」と言う（II, 951）。人の歓心を買おうとして、力足らず、笑い者にされるところも似ている（I, 775）。彼もまた、しだいにソドムの本性を見せてくる人物のひとりで、農園レストランの双子のボーイの兄のほうを囲うことになるが、話の続きをまちがえて弟にしかけて一発を食らう（III, 854）。シャルリュスに手を撫でられるコタールと同様、喜劇舞台向きのプロットである。ブロックの父の死後数年、いまでは息子のブロックが食卓で彼を罵る（III, 944）。彼はユダヤ人にして同性愛者という、『失われた時』の世界では二重苦の持ち主である。ブロック一族自体が、語り手から徹底的に笑い者にされる道化的存在であるから（ブロックの笑いは「ラッパのように騒々しい」と評される（I, 90））、ニッサン・ベルナールに救いはない。

さて笑いと微笑の頻度でかなり上位にある語り手は、微笑ではジルベルトおよびアルベルティーヌがらみが多く見るべきものがない。笑いでは、笑うよりは、笑われるまたは笑わせる場面が目につく。オデットに大げさな挨拶をして笑われ（I, 421）、ドンシエールでサン＝ルーの庇護のもとにその朋輩たち「みんなの笑い」を誘い（II, 104）、『見出された時』の不揃いの敷石の場面では屯する御者たちに「笑われる」のを覚悟で倒れかかった姿勢を続け（III, 867）、晩年にはサロンでつい自分を「若い男」と呼んで周囲の失笑を買う（III, 931）。馬鹿笑いする自分が心配である所へ行かなかったという一節（II, 368）は、その癖があったという若いころの作者を思い出させる。躾がよく、ひかえめで、誠実という語り手像が笑いと微笑にも反映している。語り手の家族の笑いと微笑は、予想されるように愛情ある善意のそればかりである。ついでにフランソワーズの笑いにはさしたるものがなく、微笑では「こせつかない、善良な微笑」（I, 779）が多いなかで、アルベルティーヌに良いようにされていると見える語り手には皮肉な微笑を向ける（III, 463 ; 749）。

ところで以上に概観してきた「笑い」と「微笑」は、言うまでもなく、単に「笑った」とか「微笑して」といったふうに単独で使われるだけではない。『ロゴス』が言うようにたとえば「微笑」という表皮の内側には「嫉妬、皮肉、愛情、……」など、おそらく無数の意味が可能だから、小説作者としては（いや、われわれの日常会話でも）「嬉しそうに笑った」というふうに意味を特定する場合が多い。形から言えば、「笑い」が名詞なら形容詞（またはそれに相当するもの）が一個または二個、動詞なら副詞（同前）が一個または二個つくあたりがふつうで、複雑さがませば修飾語がふえる（「複雑な微笑」というのもある）(7)。プルーストにはオデットの微笑に「とげとげしい、ぎごちない、おずおずした、冷たい」と形容詞四個を使った例がある（I, 420）。ところがこの微笑には、さらに「そしてこれは…（中略）…を意味していた」と関係節による説明がくわえられる。ごく簡略化して言えば、笑いや微笑の表現すべき意味の複雑度が形容詞や副詞の機能をこえる場合に、関係代名詞（同前）が登場する場合が多いことになろう。

冒頭でゾラの笑いと微笑の頻度の高さに驚いたが、今度もまた大まかながら、それらの中身の濃さについてプルーストとの比較をこころみた。すなわち、複雑な意味合いを表す主たる機能としての関係代名詞をしたがえる笑いと微笑の頻度である。

プルースト：笑い402回のうち、18回（4.5%）；微笑619回のうち、37回（6%）

ゾラ　　：笑い1,182回のうち、14回（1.2%）；微笑833回のうち、12回（1.4%）

この数値は事例をざっと見わたしたさいの印象を裏切らない。両者のあいだに差異を認めるに足るものであろうし、ともに微笑のほうが勝っていることも頷けるところである。文体論に踏み入るつもりはないが、関係代名詞の使用は笑いや微笑が文の他の要素とからむ度合いが強いわけだから、ゾラの単層的、プルーストの重層的文章という指摘もあながち早計とは言えないだろう。

問題は、神のような存在が“物語る”三人称小説ではなく、主人公である一登場人物が回想する形のこの一人称小説において、なぜ、他人の複雑な笑いや微笑にそんな解析が可能なのかということである。たとえば『失われた時』で読者が出会う最初の微笑は語り手の祖母のものだが、彼女は夫がコニャックを飲みすぎるのを心配し、悲しく思いつつも、それをからかいの種にする周囲の家族には微笑を向ける。怒らずに、なぜ微笑かと言えば、と語り手は説明をくわえる（I, 11)。祖母というのは語り手が創造した人物であるかのようである。これは一人称小説の破綻だろうか。

しかし答えはちゃんと用意されている。ヴェルデユラン氏の軽蔑的な微笑は、こんな場合に「私がこれまでに出会った多くの人たちが浮かべる」微笑である（II, 942)。あるいは「私がある種の人たちに見たことがある」ヴェルデユラン夫人のとってつけたような微笑（II, 1003)。つまり語り手は、医者が多くの症例にもとづいて病名を類推するように、積年の社交生活で培った観察眼の確かさを披瀝しているのである。この方法がツボにはまると、別々に入ってきて言葉を交わすのを見て自分の客同士が知り合いであることを知る床屋の微笑（I, 695）とか、サロンで初対面の大物ふたりを引き合わせようとする女主人が浮かべる「とくに重要なふたつの液体をはじめて化合しようとする化学者の微笑」（II, 1003）といった傑作が生まれることになる。初の状況をそれに似た既知の状況で説明する、しかも遠くて近いまた近くて遠い、意外な場面からその類似を引き出すという意味で、ここから事はもうプルーストの独自な比喩の領域に移行する。

とは言え、経験がいつも生きるわけではない。「われわれが経験したことのない感覚が発する独特な音声の意味は、けっして正確に捉えることはできない」から、麻酔なしで手術を受ける患者の苦痛の声を「馬鹿笑い」と取り違えることもある（III, 550)。こう語る彼は、カンブルメール氏の「笑いの意図そのもの」を計りかねて「好意的」、「意地悪」、「世話好き」、「残酷にも共犯的」の四説を列挙する（II, 978)。また深淵中の深淵、アルベルティーヌの「深い笑い」にも、語り手は「それとも、それとも」と三説のなかで迷う（III, 130)。しかし、このように取りつく島があればまだ

いい。語り手が最後に辿り着くのは、逃げさる女アルベルティーヌが「虚空に微笑」する姿である（III, 149)。

注

（1） Marcel Proust : 〈A la recherche du temps perdu〉（Pléiade, 1954)

（2） 本論での「笑い rire」、「微笑 sourire」は、ともに名詞や動詞およびその他これから派生した語をすべてふくむものとする。

（3） DISCOTEXT 1, Textes Littéraires Français 1827-1923（Hachette, 1992）検索した語は注（2）に同じ。

（4） Etienne Brunet : 〈Le vocabulaire de Proust 〉（Slatkine, Genève 1983)

（5） Marcel Proust : 〈Correspondance〉 XVIII, p.167（Plon, 1990)

（6） 同上、XVII, p.417（Plon, 1989)

（7） Michel Launay : 〈Sourires proustiens〉 in *Littérature*, No.38（mai, 1980）は、「微笑」に付された形容詞をもとにして、社会階級の観点からプルーストの微笑を論じている。